

貨幣の實體價值と機能價值

茲に掲載するのは余が或機會になしたる講演の原稿である。元來専ら一般の理解を期したるものにして學者の眼に觸れしむべきものではない。

抑々貨幣が如何なるものであるか、即ち貨幣の本質如何といふこと、價值とは如何なるものであるか、即ち價値の意義如何といふ問題は今日理論經濟學、殊に貨幣理論中重要な地位を占める問題であつて、之を一朝一夕に論じ盡すことはできない。更に進んで貨幣と價值とを結び付けて「貨幣價值」といふ熟字を作れば、之は又新たな意味を得來り、更に之が貨幣の購買力と解さるゝに於ては物價の問題と關連して、問題の場面は愈々廣くなるのを覺える。併し吾人は今之を詳述するの餘裕を持たない。故に夫れ等に就いては必要に應じてその場合々々に關説するに止め、故ら一般的論述をなさず主として所謂貨幣の實體價值とは何か、又機能價值とは何をいふかを見、尙之と並んでその兩者の關係に就いて考察しやうと思ふ。

貨幣の實體價值と機能價值

(三九五)

三五

凡そ貨幣の實體價值を云爲するのは、貨幣を以て價值の尺度 Measure of Value, Wertmesser と見る考から出發してゐるものの如くである。然かも價值の尺度といふことは通常交換の媒介といふこと、相並んで貨幣の二の主要なる機能(職能)であるとして説かれてゐる。今此の後者即ち交換の媒介といふことに就いては少時措き、その前者即ち價值の尺度といふことから説いて、それが貨幣の實體價值と如何なる關係にあるかを考へてみやう。

元來吾人が物の長さを計るには物差を用ひる。物差はそれ自身長さを持つてゐるものである。自分に長さを持つてゐるところの物差を用ひて初めて物の長さを計ることを得ると考へられる。長さのないものを以て長さを計ることはできない。然かも一尺の長さを計るには一尺の物差を要し、(一尺より短い物差を以てする場合にはそれを繰返し用ひて計る) 五寸の物を計るには五寸の物差を要する。即ち計るものと計られるものとが同じだけの長さを有し、計るものの方に目盛があつて、その目盛を數へて、計られるものがその目盛の幾つ々に相當するだけを持つてゐるといふこと、換言すれば長さの單位幾つといふことを知つて、初めてその物の長さが何尺何寸あるといふことがわかるのだと考へられる。

そこで貨幣が價値の尺度であるといふ考は、茲にその考方の基礎を置いてある様に思はれる。貨幣は價値を計るものである。即ち或品物を五圓といひ、十圓といふのは、その品物の價値を貨幣で計つた結果である。物差が長さを計る道具であると同じ様に貨幣は價値の大きさを計る道具である。貨幣が價値の尺度であるといふ言葉も此處から出て来る。そして一尺の物を計るに一尺の物差を要し、二尺の物を計るには二尺の物差を要する。勿論五寸の物差で二尺の物を計ることができぬことはないが、此の際には少くともその五寸の物差を四回重ねて用ひて、言ひかへると五寸の物差を當てがつてその物の一部分が五寸あることを確かめ、その次の部分から又五寸を計り、かくして次々に計つた結果を加算して、それが二尺であることを知るのであるから、用ひた物差は五寸であつてもそれを二尺に延ばして用ひて、初めてその物が二尺であることを知るのである。之と同じ様に一圓のものを計るには一圓の價値ある貨幣が必要である否一圓の價値ある貨幣を以つて或品物を計つてみて、初めてその品物の價値が一圓であることを知るのである。即ち一圓のものを計るには一圓の價値ある貨幣が必要である。而して此の意味での貨幣の價値がその實體價値である。

(一)尙此の實體價値に就いての甚だ鋭き論駁は左記の書に見出される就いて見らるべし。

Vgl. Georg Simmel, Philosophie des Geldes. 3. Aufl. 1920. S. 101 ff. 恒藤恭著「ジムメルの經濟

哲學」

貨幣の實體價値と機能價値

(三九七)

三七

以上に於て諸君は貨幣の實體價值とは如何なるものであるかに就いて臆氣ながらもその概念を得られたりと信するが故に、次にはその機能價值に就いて少しく論じて見やうと思ふ。併しそれに論及する前に吾人は茲に於て先づ價值といふことに就いて少しく顧みなければならぬ。一般に價值といふときに、經濟學に於てはそれが使用價值と交換價值とに區別して考へられる。併し交換價值といひ使用價值といひ共に價值である。兩者共に價值でありとすれば、その兩者に共通な性質がなければならぬ。兩者が共に價值と呼ぶべき所以のものがなくては叶はぬ。換言すればそこに價值性がなければならぬ。一般に交換價值と使用價值とを區別しないで價值といはれるときには此の價值性を見てゐるものと考へなければならぬ。然らば價值性とは何であるか。

茲に價值とか價值性とか云つても勿論、それは經濟學上の意味から云つてゐるのであつて、經濟學からその言葉を借りて行つたのではあるが現今特殊の概念内容を有するに至つた哲學上の價值に就いては之を措いて問はない。尤も哲學上に於ても經濟學上に於ても共に價值は一のスピリクス(Spiritus)であることには變りはない。價值には常に暗い運命がつきまとつてゐる、少くとも最後に至つて割がすことの出来ないベールに依つて覆はれてゐる様に思はれる。私は今茲に之を詳論する餘裕を有しないものであるが、併し凡そ價值とは物そのものに固着してゐる性質ではないといふことはいへる。

従つて實現體それ自身 (Wirklichkeit schlechtin) には決して價値はない。現實體そのものに價値が固着してゐるが如く考へるのは素朴な然かも極めて悪い意味にての價値實在論である。而して今日かゝる考は哲學上でも許されることはできない。價値が物に固着せる性質でないとするれば然らば如何なるものであらうか。

凡そ或物に價値ありとし又價値なしとするのは時と所と人との依るものである、甲の人が或時或場所て價値ありとするも、他の人は同時同所で價値なしとするかも知れない。又同じ人でもその時と場合とに依つて價値に高低をつけ、又は或時は價値ありとしたものに就いても、次の時には價値なしとするかも知れない。即ち經濟學上の價値は吾人の評價に従ふものである (哲學上のいはゞ絶対的の價値は之と趣を異にするも今は論じない)。吾人が評價して價値ありとするときその評價の對象に價値は認められ、又價値なしとするときにはその對象は無價値のものと思はれる。重ねて云ふ、價値は評價に従ふものである。然かも評價は物其のものに就いて、換言すれば物の實體に就いて下すことではない。例へば貨幣の實體たる金銀などの貴金屬そのものに就いて評價するといふことは路傍にある石ころそのものを評價するといふことと同じ程度に無意味である。かくの如き評價の結果は何物も出て來ない、否かゝる評價そのことさへ不可能なのである。吾々が評價するといふのはその實體の作らきに就いてである。路傍の石ころを例へば漬物石としての作らきに就き評價するのと同じく貴金屬を

ば或は裝飾品として又は貨幣としての作らきに就いて評價するのである。その結果その石ころなり貴金屬なりに價值が生ずる。換言すれば價值が認められる。此の意味に於て價值は或ものゝ作らきに就いての價值、言ひ換へればその機能價值でなければならぬ。そして一般に價值とは機能價值なりと考へられるのである、果して然りとすればかの實體價值といふ言葉そのものさへが既に形容の矛盾(contradictio in adjecto)になる。併し實體價值とは何も意味しないかといふと必ずしもさうではない様に思へる。之は貨幣を構成してゐる實體の一の機能に就いての價值とすればその意味は一と通り通ずる、即ち實體そのものの價值ではなく實體の機能價值と評すればいゝのである。併しかく考へれば之は最早一の機能價值にしてその機能價值と區別したる意味にての實體價值ではあり得ない。而して終に機能價值に過ぎないことになる。かくして結局實體價值はその意味をなさぬ事となる。而して又價值とは機能價值に外ならないこととなる。此の間の消息を更に詳しく説明する爲に吾々は實體(本質)と機能との關係をもつと突き入つて考へてみよう。

三

ウィーン(Wien)大學の教授オットマー・シュパン(Othmar Spann)に従へば凡そ物を見る觀方に二通りある。一は或物を他との關係から切り離して、即ちそれを孤立的に見る觀方であり、他は物を他との

關係に於いて觀る觀方である。今之を社會内の現象に就いて云つても、その現象を一個獨立の他と何等交渉のない現象としてみることもできるし、又之を一の社會現象といふ全體の内の一部の現象としてみることもできるのである。之を一般的に云ふと、全體の中の部分であるものも見様によつては獨立のものとして、即ち全體との關係を切り離してみることができ(尤もかく見た時はそれは最早部分とは云はれない)又その部分を全體の内の部分として、即ち全體との關係の中に於て見ることもできるといふのである。第一の場合には(此の方法に依る概念構成は)凡ての現象の被制約性(Bedingtheit)、本質(Wesenheit)を眺めるのであり、後の場合にはその現象が絶體的な作用の中に於ける關係、換言すれば全體の中に於て部分のなす機能を見るものである。而して第一の方法によつて得られるものは本質概念 Wesensbegriff であり、第二の方法によつて得られるものは機能概念 Funktionsbegriff である。

(一) Othmar Spann: Zur Logik der sozialwissenschaftlichen Begriffsbildung. 1915 之は本誌次號に譯載する豫定である。就いて見られたし。

シュバンはかくの如く本質概念と機能概念とを區別したのではあるが、併し尙之に附け加へて云つてゐる。即ち此の二の概念はかく區別はしたものの實は認識論上同じ構造を持つてゐるものである。元來事物の概念、即ち本質概念といつてもそれはその物の屬性の全體だともいへる。「ところが屬性」とか「特質」とかいふものは獨立な存在ではない。それは常に事物の特質である。即ち相互に關係して

あるものでありそして又そのものの機能として見られるものである。併しかう見てくれば本質概念といふことも甚だ怪しくなつて來て、終にはその本質概念は機能概念に分解して仕舞はなければならなくなるのである。

而して更に忌憚なく云へばかくして本質概念と機能概念との區別は消滅して仕舞ふのである。故に Spann も此の點に氣付いてゐるから更に語を次いで次の如く云つてゐる。かくて此の兩者は認識論上の論理的構造に於て何等異るところはないのであるが只之を分けて考へることは方法論上（研究手段上）便利があるからであると。

茲に於て吾々は考へなければならぬ。本質概念と機能概念との區別が便宜の問題に出づるならばいざ知らず、又その限りに於て此の區別を採用すると否とは吾々は敢へて干渉しない處であるが、元々その構造の全く同じいものを論理上區別するといふことは出來ないではないかと。

四

かくて吾々は元の論程に戻る。上述の處でシュパンが本質概念といふ言葉にて云ひ表はしてゐるのは吾人が先きに述べた實體といふことゝ相通じ又從て彼の本質概念と機能概念との關係は貨幣論上の實體價值と機能價值との關係に移すことができる。貨幣の實體價值はその貨幣を構成してゐる物（

素材)の機能価値である。只その機能が貨幣としての機能であるかそれ以外の機能であるかに區別があるのみである。例へば茲に十圓の金貨があるとす。その十圓金貨の機能価値といへばそれを貨幣として用ひて十圓に通用するといふことである。即ち貨幣としての機能をなすといふことである。

然るにその實體価値といふのはその十圓金貨の地金を貨幣以外の用途例へばメタルにしたりカラス陰にしたり又之を鑄潰してネクタイピンや簪などにして用ひられるといふことである。即ち貨幣として以外の例へば裝飾用としての機能価値があるといふことである。併し今金に如斯価値があるとしてもそれは最早貨幣としての価値ではない。貨幣以外のものとしての価値である。故に貨幣としての価値は即ち貨幣としての機能価値より外ない筈である。従て貨幣の實體価値は最早貨幣の価値ではない貨幣を構成してある素材たる貴金屬が貨幣とし以外の他の用途に對する価値である。

(二) 左右田喜一郎著「信用券貨幣論」二八頁參照

かくして貨幣の価値とは貨幣の機能価値でなければならぬといふ結論が生ずる。而して貨幣のかくの如き機能価値は素材の価値即ち實體価値なくしても存立する。即ち例へば十圓の紙幣は僅に數錢の費用を以て發行せられる一紙片に過ぎない。而してその實體価値即ちその貨幣として以外の価値は皆無に等しい。人々は凡らく使ひふるしてひごく汚れ、折目から切れ相になつた十圓紙幣を見て、それが十圓に通用するといふことから離れてその汚ならしい一片の紙に對して、何等の価値を認めないで

あらう然るに事實は如何。かくの如きその實體價值は皆無といつてもいゝ様な紙幣が金といふ如き實體を持つた鑄貨と同じく有効に通用してゐるではないか。之正にその機能價值に依つてでなければならぬ。

而して貨幣はその實體の中になく、物に固着の性質でなく貨幣たる機能のあるところに貨幣がある。F. A. Walkerは主張して言つた。“Money is that Money does.”貨幣とは貨幣の作用である。機能概念としての貨幣は正に如斯ものでなければならぬ。

- (一) F. A. Walker, Money in its Relations to Trade and Industry. 1889 (1st. ed. 1879) p. 1.